

奈良 いのちの電話

2019
夏
第377号

特集 「食べる」ことはいのちの原点

家令 牧氏

社会福祉法人 奈良いのちの電話協会

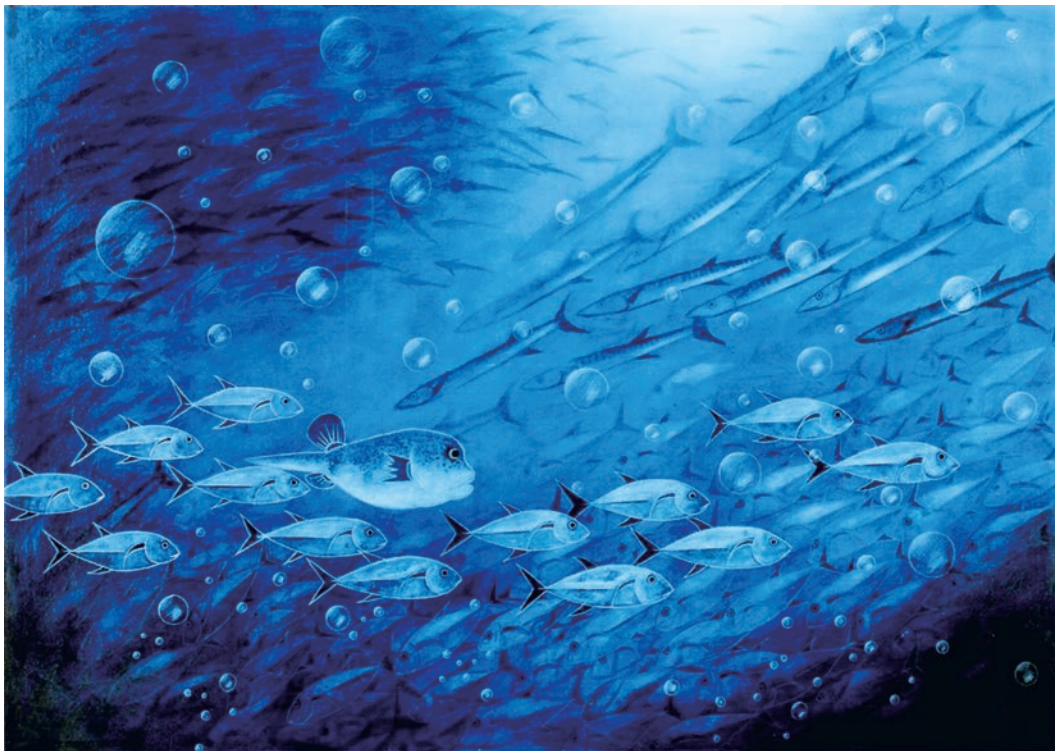
事務局/〒631-0816 奈良市西大寺本町8-27



TEL : 0742-35-0500

FAX : 0742-35-0533

e-mail : nid@nara-inochi.jp



「海」画・河崎富子

青海原
藻の花ゆらぐ波の底に
魚とし住まば悶えざらむか

芥川龍之介

風鐸



夏の訪れを告げる一つが、蓮の花だ。蓮という言葉の由来は、花びらの真ん中にある「花たく」が、蜂の巣に似ているところから、「はちす」で「はす」になっただけ。「花たく」というのは、丸い中にぷつぷつがあって花びらが落ちた後、見た目がシャワーの先みたいになっている部分。

奈良には「ロータスロード」と呼ばれる蓮の道がある。薬師寺、唐招提寺、喜光寺の3寺を結ぶラインのことだ。例え

ば唐招提寺では鑑真和上由来の「唐招提寺蓮」や「奈良蓮」といった珍しい蓮が顔を並べるなど、6月下旬から8月中旬まで、3つのお寺でそれぞれ美しい蓮の花を愛でることができる。

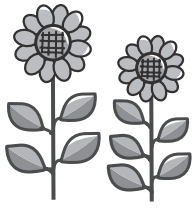
蓮の花の特に愛らしいところが、一日のほんの短い時間しか咲かないこと。朝大きなつぼみを開いたかと思えば、昼には硬く閉じてしまう。だから早起きして見に行くしかない。短い時間に凛と生きる様は蓮の花の神秘性を一層際立たせる。

蓮がお寺に多いのは仏教的に意味が深いとされるからだ。蓮は、泥の中で成長して、とても美しい花を咲かせる。この

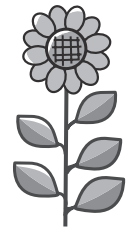
泥の中が我々人間世界のことを指し、周りがどんな状態であろうと心は美しく保とうという教えであるという。なんと気高い花だろう。

現実の泥の世界。誰でも足をすくわれたり、もがいたり、周りが見えなくなったりする。でも泥をかぶらず生きている人はいない。そして泥が深くて必ずいつかそこから脱出できる。そもそも泥の世界と思うかどうか自分次第ではないだろうか。泥を潜り抜けるからこそ、美しく強い自分だけの花を咲かせられるように思う。そう信じて今日もしっかりと真つすぐに生きよう。(佳)

寄り添い人を訪ねて V



「食べる」ことはいのちの原点



たんぽぽ子ども食堂 家令 牧 氏

家令 牧 氏 プロフィール



社会福祉法人わたぼうしの会
たんぽぽ楽食サービス 代表
三重県津市出身。短大卒業後幼稚園4年間勤務の後、日本青年奉仕協会主催「一年間ボランティア計画」に参加。岩手県奥中山にあるカナン園・小さき群れの里（障害者収容施設）にて1年間ボランティアとして活動。
その後、たんぽぽの家に就職（1990年）。

- 1998年 たんぽぽ楽食サービス設立
- 1999年 配食サービス事業開始 会食サービス野土花サロン実施
- 2017年 たんぽぽ子ども食堂設立

昨今子どもを取り巻くさまざまな社会問題が起きている。今回の特集では、そんな時代に「食べる」ことを通して子どもたちに寄り添い、生きる根本を支えておられる家令牧氏にお話を伺った。

子ども食堂立ち上げ

施設で働いていたので、障害者施設の食事サービスや高齢の方への配食サービスの仕事を20年以上してきました。数年前からいろいろな子どもの問題が社会的に取り上げられるようになりました。いじめや虐待、貧困などで子どもたちが追い詰められ、逃げる場が無く死を選ぶなどというニュースを見るたびに心を痛めていました。子どもたちのために何か出来ないか、いやせねばならないと強く思いました。食事というのは生活の基盤です。「食べる」ことなら自分に出来ることがあるかもしれないと考えるようになりました。

そこで奈良市社会福祉協議会の方や児童民生委員の方、住みやすい地域にしようという活動をされている方々とも相談して、子ども食堂を作ろうと思いました。その時に、この地域は普通の住宅地だから子ども食堂は必要ないんじゃないかという意見もありました。確かに東京では今日ごはんが食べられないという1人の子のために子ども食堂は始まったと聞いています。大阪の西成では貧しくて食事が出来ないから子ども食堂にごはんを食べに来るというわかりやすい立ち位置に子ども食堂はあります。そういう意味でこの地域に子ども食堂が必要なのかという意見でした。けれど普通の住宅地でも母子家庭も父子家庭もあります。学童が終わったあと、親が帰ってくるまで1人でいる子どももいます。1人で食べる

子どももいます。現状が言えないだけなんです。1人暮らしのお年寄りもいます。

私には、とにかく孤立を0にしたい、住みやすい地域にしたいという思いがありました。まず先に、人が集まれる場所をとということで「カフェ」と福祉ホーム「有縁のすみか」が開設しました。そしてそのあと「たんぽぽ子ども食堂」を立ち上げました。ちょうど2年前です。チラシを作る時には「貧困対策」とか「困っている」というワードは使わずに、子どもが1人ででも気軽にごはんを食べに行ける場所、100円でごはんが食べられるところだから、夕方1人でごはんを食べるんだったら、子ども食堂と一緒に食べようと声を掛けました。

当時奈良県下には10数箇所ありました。他の子ども食堂は月に1回土曜か日曜のお昼にイベント的に開く所が多かったのですが、たんぽぽ子ども食堂は平日（金曜）の夕方に毎週開くことにしました。4時半から7時半までみんなびっしり居ます。



子どもたちとどう接するか

子どもたちは毎回大体20名程やって来ます。小学2年から小学5年が多く、中学生も来ます。何人かで一緒に来る子も1人で来る子もいます。保育園児の子どもと一緒にお父さんが来られるおうちもあります。子どもたちは夕食まで（だいたい6時頃）宿題をしたり、遊んだりしています。男の子の中には非常に活動的な子もいますが、命に関わる程危険なことではなければ注意はしません。近くの高校の生徒がボラン

ティアで毎回5～6人来てくれて子どもたちの相手をしてくれます。私たちボランティアスタッフは主婦が多いので、始めの頃はどうしても細かいことをいろいろ言ってしまうました。子どもたちはあっちでガミガミこっちでガミガミ言われたらしんどいです。そこで自立援助ホーム「あらんの家」の浜田進士さんに来ていただいて勉強会を開いて、子どもたちへの接し方を教えていただいています。説教はしないこと、見ざる言わざるになって大半のことには目をつぶることなど大切な心構えをスタッフ全員で勉強しています。個々の家庭の事情は一切訊きません。顔や様子を見ていつもと違うと感じることは大切ですが、こちらから訊くことはしません。子どもの方から発信してきたら話を聴く、でも意見は言わないようにしようと話し合っています。子どもたちが「本音の言える場所」にしたいと思っています。

子ども食堂の今後

極力赤字は出さないようにと思っています。食事代は子どもは100円、高校生ボランティアも100円、大人のボランティアは300円、例外的にですが、保護者は500円もらっています。親子で受け入れている子ども食堂もありますが、うちはまずは子どもだけを受け入れよう決めました。高校生ボランティアは最初は無料にしていたのですが、よく食べるのできつくなって100円もらうようになりました。幸いお米の寄付が多いのと、奈良にフードバンクが立ち上がったことや、おてらおやつクラブから時々お菓子をいただくことでとても助かっています。寄付金も集まります。そのためにはこちらから発信しないとイケないし、信頼してもらわないとイケないと思います。私たちの方から地域の中に出ていき、一人でも多くの方と顔見知りになっていくことだと思っています。たんぼぼ子ども食堂は法人が基盤にあるのでいいのですが、現在奈良で40箇所ほどある子ども食堂の中で小さな所が継続していけるように努力しないとイケないと思います。

そして子どもの安全を守ること。帰りが夜になるので子どもを1人では帰さないように気をつけています。親御さんに迎えにきてもらうとか送っていくとかしています。

子どもたちは際限なく求めてきます。好き放題にふるまう子もいます。どこまで受け入れるか、こちらはどこまで言うか悩んでいます。ただ、人を傷つける言葉を発することや、あまりにもわがままな時は言わなければいけないし、どこまで見守るほうがいいのかなど葛藤しています。高校生も巻き込んでミーティングしていきたいと思っています。大学生ボランティアをもっと増やしたいと思っています。

子どもたちが気軽にここへ食べに来てくれること、子どもたちの本音が見えるようにすること、いつでもSOSの声を聴きとることができる、そんな居場所を作っていくことが課題です。

ここは施設なので毎日開くことは出来ないけれど、いつか子ども食堂を朝から晩までいつでも食べられる、いつ来てもいい場所にするのが理想です。だって、人間しあわせと思う瞬間がたくさんある方がいいですから。(M)

情報化社会のなかで考える

本音 17

— 植村圭子先生のこと —

社会福祉法人 飛鳥学院

児童発達支援事業所あすか 指導員 堀岡 克匡

「……『いのち』の活動にとって先生のきびしさが必要です。何とぞこれからもよろしく願います。私は人生の節目と運命にしたがって、生き方を少々整理したいと思っています……」2017年1月、植村先生からいただいたお葉書の一部を引用させていただいたこと、どうかお許してください。

ご苦労されて書いていただいた文章を拝読した後、20年ほど前に、奈良いのちの電話（以下、NID）にかかわらせていただいたことを思い出しました。その頃、今のSC（スクールカウンセラー）事業の前に、県教委が委嘱したカウンセラーが学校等を訪問し先生方と相談するという事業がありましたが、それに同行し臨床心理の先輩の実践を目の当たりにさせていただきました。話が横道にそれましたが、その先輩の先生から推薦していただき、NIDの相談員のSV（スーパービジョン）をさせていただくことになりました。この仕事は今もさせてもらっていますが、植村先生より大変難しい課題を依頼されたこともあります。

2009年、植村先生より、養成講座の“カウンセリング入門（1）——対面における——”という講義をするようお誘いを受けました。講座の中で、“相談”というのは、聴く、感じる、見る、読む、創造する、返す、つながることであり、また、沈黙の大切さ、相談が終わって相談員が何かしんどいもの抱えてしまったと感じる時、逆に相談者は重荷を軽くできることなどを一生懸命話しました。受講生の皆さんは、そんなしんどいこと無理、分かりにくい話、やってみよう、などさまざまな表情をされていました。講義の後、受講生が個人的に質問や抱えている問題について相談に来られたのは、しっかりと聞いていただけたのではないかと思います。私にとっても初体験のNIDでの講義を、植村先生は後ろの席で2時間半最後まで、時折にこにこしながら聞いてくださいました。面接は細々と続けていましたが、話すことはまだまだ未熟で、先生がおられることで緊張もありました。

先生よりいただいたお言葉、お便り、講義での笑顔、などは今も私の心の中に生きています。もう少し臨床心理の実践を続けていく礎とさせていただきます。植村圭子先生有難うございました。（協会研修委員）